

KS
DP 関西大学
戦略的研究基盤
団地再編
リーフレット
-Re-DANCHI leaflet-

MARCH 2014 VOL. 153



1

1. はじめに

グローバル化と経済格差の拡大や文化の均質化、それらと表裏をなして生じやすい社会的排除、あるいは世帯の小規模化や多様化によって、進行しがちな孤立化、さらに著しい都市化の進行による、地域の記憶の喪失、暮らしと環境の交わりの希薄化。このような、社会が構造的に抱えている課題が、個人と地域を大きく揺さぶっている。

個々のアイデンティティ確立の困難さにはじまり、個人と地域を支えてきた“つながり”の弱体化が深刻な問題になってきている。ここでいうつながりとは、生活・地域・社会を支える目に見えない絆・基盤としての社会関係資本、すなわちソーシャル・キャピタルである。

この、個人と地域を揺るがすつながりの弱体化という課題を克服するには、「地域資源の活用」が鍵と考える。ここでいう“地域資源”とは、地域の特性を物語る、自然、建築・街並み、生業、産物、人・組織、祭事、風習などを指すが、これらの資源を媒介に、人と人、人と地域の時間的・空間的つながりを重層的に紡ぎ、地域の力を引き出していくことを、つながりの再デザインの目的とする。そこで、具体的に大阪・上町台地界隈をフィールドとした実践を行ってきた。

2. つなかりを媒介する地域資源の価値

実践内容を述べる前に、フィールドとしての上町台地界隈の特性の一端を紹介する。上町台地は、地形的にも歴史的にも大阪の背骨というべき場所である。北に大阪城・難波宮、南に四天王寺など、日本史を象徴する資源が存在している。多くの学校や医療施設も集積し、都心居住の人氣も高いエリアである。

近年は、多様な地域資源を再生・活用する動きが顕著だ。たとえば、

空堀界隈の長屋再生、玉造界隈の伝統野菜の復興、寺院や神社を舞台にした文化活動やコミュニティ・サポート、新たなまつりの数々も生まれている。また、コリアタウンでの多文化共生の取り組みや、ゲストハウスでの多彩な人的交流なども見られる。

そして、大阪ガスの実験集合住宅 NEXT21 が、まさにこの台地の中心部に立地している。

こうした地域資源の再生・活用プロジェクトは、「歴史につながる生活実感の共有」「まちに住む文化の発展的な継承」「個人と社会を結ぶ共の場の形成」「風土に根ざす生活文化の再評価」「多様な文化・価値観の受容と共生」といった価値を生み出している。

そこで形成されるつながりが、過去・現在、新・旧、自・他、異・同といった対照関係にあるものの交わりを促進し、地域に潜在する課題の認識や解決への力を育む効果をもたらしている。

3. NEXT21/U-CoRo ウィンドウからの実践

つながりの相乗効果を高めていくための実践として取り組んできたのが、U-CoRo プロジェクト (Step1) である¹⁾。

上町台地に立地する大阪ガス実験集合住宅 NEXT21 の1階北側に設けた、U-CoRo (ゆーころ = 上町台地コミュニケーション・ルーム) と呼ぶ小スペース

を活用した仕掛けだ。取り組みの狙いは、「U-CoRo をインターフェイスに、地域資源の可能性を物語るコンテンツを提供」することによって、「多様なプレイヤーの交流を媒介し、新たなつながりを誘発していく」ことである。

取り組みの手法はシンプルだ。4つの基本テーマ、①地域文化の再発見、②多世代・多文化共生、③減災文化の創造、④自然・環境の再生を軸にコンテンツを構成し、ウィンドウ展示と関連するワークショップや交流イベント等のプログラムを展開する。

この、地域の物語としてのコンテンツへの関わりを、人と人、人と地域のつながりを育むプロセスとしていく (図1)。

同プロジェクト (Step1) は、2007年から2012年まで「まつり」「子

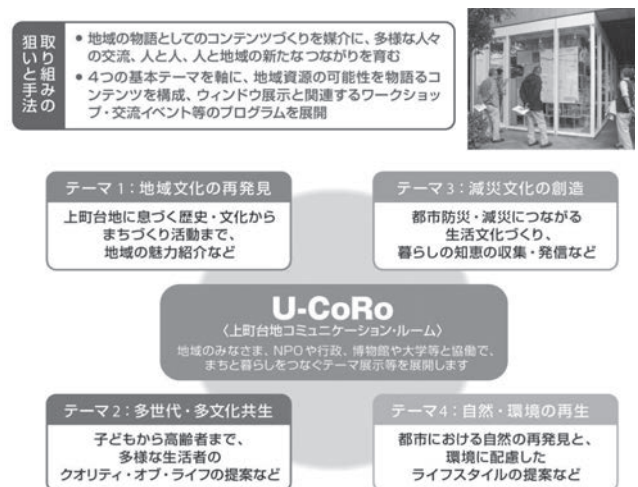


図1. NEXT21/U-CoRo プロジェクト (Step1) の狙い



図2. 上町台地をめぐる15のコンテンツの展開

もと遊び」「いのちをまもる智慧」「伝統野菜」「コミュニティグリーン」「ものづくり」「水の縁」など、15の物語としてのコンテンツを地域の方々とともに展開した(図2)。

たとえば、第1回の「上町台地まつり絵巻」では、新住民がまちの歴史・文化に触れる入り口として、春夏秋冬のまつりを絵巻のように紹介し、関係者の交流の機会もつくった。

第2回の「上町台地子どもと遊びいま・むかし」では、3世代の居住者の子ども時代の遊び場を調査しマップに表現し、子どもたちとまちの交わりの大切さを考え伝える機会にしている。

15回までの展示内容等の詳細は、ホームページでアーカイブとして公開しているので、そちらを参照いただきたい⁽¹⁾。

4. 始動期の評価から展開期・浸透期の実践へ

実践の始動期1年目に、効果や課題を把握するための調査を行っている。コンテンツの提供に主体的に関わった方々へのヒアリング調査では、属性の異なるプレイヤーの出会いが課題解決の力につながる動きが見られた。一方、提供されるコンテンツを受け止める立場のNEXT21入居者へのアンケート調査では、生活の中での情報の活用が確認できるが、新たなネットワークの形成につながるには、参加を容易にするコミュニケーションデザインが必要であることも見てとれた。

そこで、展開期では、さまざまな動機を喚起し参加の間口を広げるテーマの設定や仕掛けの導入と、取り組みの背景やプロセスを見える化し、気づき・共感を誘発するツールの活用を行っている。

5. 玉造黒門越瓜“ツルつなぎ”プロジェクト-広がる人の輪

参加の幅を広げ共感を育むテーマや仕掛けの一つとして、上町台地の

地野菜「玉造黒門越瓜」の復興に取り組まれている玉造稲荷神社とともに、栽培を通して顔の見える関係を築いていくプロジェクトを手がけている。

2008年にはじまり、継続して、学校・幼稚園、まちづくり拠点、ケア施設、社寺、商庖、住宅など、話題を共有する栽培ポイントを時間をかけながら定着させてつづけている。

並行して栽培の様子や、収穫祭の様子、自慢の料理での交流の様子など、新聞形式でレポートし、経験を共有できるツールとしている。

6. “減災”のコンテンツの埋め込み

また、命に関わる事柄でありながら、日常生活の中で置き去りにされがちな「防災・減災」を、いかに身近なものにしていくかという問題認識から、「減災文化の創造」を重要なコンテンツとして、一連のコンテンツ群の中に埋め込んでいる。

まずは、全国の智慧に学んで、もしもの時に備え外の力とつながることを狙いとしたコンテンツ。被災地で培われてきた智慧を集めたストーリーブック『いのちをまもる智慧』(発行:NPO法人レスキューストックヤード)を上町台地で紹介し、このツールの制作に携わった災害救援のNPOや専門家を上町台地のまちづくり関係者につないでいる。

上町台地の災害リスクにも思いを馳せて、もしものときに備える外部との縁づくりである。

次に、阪神・淡路大震災の経験をもとにつくられた、減災ゲーム「クロスロード」(制作・著作:Team Crossroad(網代剛、古川肇子、矢守克也))を活用して、地域の内発的な気づきを誘発するコンテンツに取り組んだ。

上町台地境界の5つの特徴的な場所で、ワークショップを実施。もしものとき、さまざまな判断を迫られる体験を通して、当事者としての減災へのスイッチが入る。

ゲームが終わると、「災害時にお寺にできることは…」、「長屋のまちを未来に継承するには…」といった声が出てくる。こうした取り組みの波及効果として、地域のまちづくりの担い手と、外部の専門家が協働で減災について考えるイベントなどが、連鎖的に生まれてきた。

その様子も、新聞形式でレポートし智慧とネットワークを共有するツールとしている。

さらに、身近な避難所体験を入り口に、地域の防災活動に学んで、智慧とネットワークを共有するための、取材展示にも取り組んだ。

住商工一体のまちの緻密な避難想定と連携、ふだんの学校との付き合いの大切さ、都心の避難所が抱える問題、指定避難所以外の拠点の役割など、地域事情に応じた減災まちづくりの第一歩が見えてくる。

7. つながりの再デザインが開く可能性と回路

ここで改めて、15のコンテンツが物語る可能性を振り返ってみたい。

「まつり」からは、時空を越えてつながる生命と文化のダイナミズム。「伝統野菜の栽培」からは、風土とのつながり、経験の共有の実感。「減災ネットワーク」からは、日常生活文化としての減災文化のありよう。

「子どもと遊び」からは、つながりの原点としてのまちや大人との交わり。さらにつながりのスタイルを媒介する「コミュニティグリーン」。人とまちをつなぐ「手仕事・ものづくり・なりわい」。いのちとなりわいを支える「水の縁」といった、可能性が見えてくる。

一連の実践を通して、つながりの再デザインの効用を引き出す回路も見えてきた。

回路1は、基盤となる自己と風土のつながりを、日常のなかで耕していく回路。

回路2は、自己と他者のつながり、多様ないのちのつながりを、属性を

越えて共有する回路。

回路3は、地域と外部のつながり、新たな気づきを促し、エンパワーメントの連鎖を生み出す回路。

回路4は、資源と地域のつながり、環境・福祉・文化・減災等一体の、重層的なコミュニティ・デザインへの回路である。

1～4の回路を、地域と暮らしの中に組み込んでいくことによって、いのちと暮らしの基盤の再生に近づいていく。

8. つながりの再デザイン・プログラムで育む地域の力

長屋の集積地、寺社の集積地、文教住宅地、マイノリティの集住地、マンション群など、さまざまな居住地特性の中にある、地域資源を見出し、そこにつながる再デザインの回路を導入していくことによって、地域の力を引き出していくことができるのではないだろうか(図3)。「地域に暮らす自覚と愛着を育む力」「災害リスクに思いを馳せて備える力」「子どもの育ちを支える力」「単

身世帯や高齢者の孤立を防ぐ力」「マイノリティを包摂する力」「過去に学び未来を思う力」などである。これらの力は、東日本大震災をはじめ災害多発時代を迎え、また激しいグローバル化の波、少子高齢化・人口減少の進行の中で、改めて聞か直されている地域の力でもある。

9. おわりに

U-CoRo プロジェクト(Step1)の実践を振り返り、その効果と可能性について簡単に報告した。

コンテンツ提供への能動的な関わりを可能にするテーマ設定によって、地域に対する関心の幅が広がり、プレイヤーそれぞれの属性の枠を超えた重層的な交流や活動の兆しが見えてくること。

また、潜在する地域課題に対して、地域外の専門家等のまなざしを得ることによって、自らの暮らしと地域への問いが立ち上がり、地域資源に根差した創造的な問題解決と価値創造の回路が育まれていくこと。

個々の経験を共有できる仕掛けを

介したネットワークの実感が、地域に暮らす実感にもつながっていくことなどがうかがえた。

個人化や多文化化が進む社会にあって、多様な価値観を受容しながら地域への愛着を育むまちづくりが求められている。

地域資源を活かし、多様な主体の交流を促し、新たなつながりを築き上げていく実践から、地域の暮らしを持続的に支えていくための、ソーシャル・キャピタルのありようを展望するとができる。

地域資源を活かした重層的なつながりの形成が地域の力を引き出していく可能性が示唆されている。この間の蓄積を活かし、実践と考察を深めていきたい。

なお、本稿は、情報誌 CEL99号(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所、2012年2月)に掲載したレポートを改訂したものである。

注記

(1) U-CoRo プロジェクト(Step1)の詳細は、ホームページで紹介している。

<http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/issue/cel/index.html>

ウィンドウ展示や関連イベントは、U-CoRo プロジェクト・ワーキングが企画・運営。同ワーキング・コアメンバーは、弘本由香里(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所)、橋本護(B-train)、早川厚志(まちづくり工房)。デザイン・ワークは、北浦千尋(2006～2007年参加、アセテート)、小倉昌美(2007年以降参加、B-train)

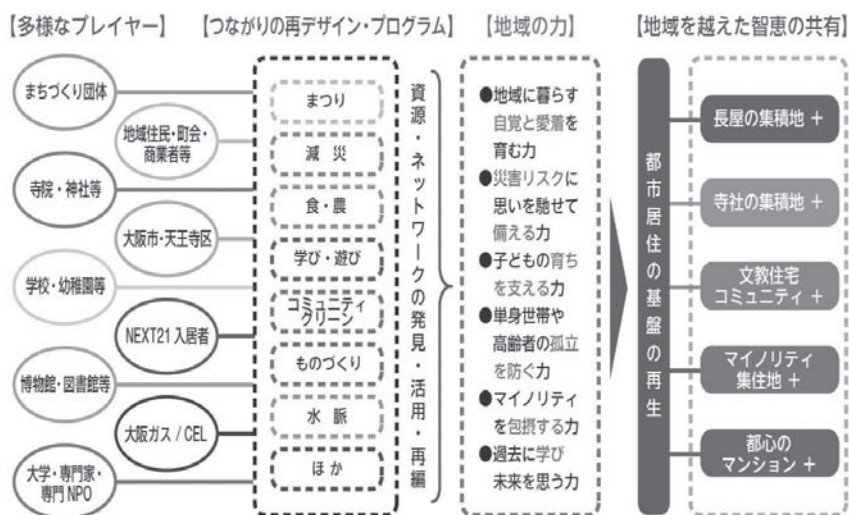


図3. 地域の力を引き出すつながりの再デザイン

『地域資源とつながりの再デザイン』

— U-CoRo プロジェクト(Step1)の実践から —

講演・再録*: 弘本由香里(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所)

作成・協力: 保持尚志(関西大学大学院博士後期課程)

※本稿は第18回関西大学先端科学技術シンポジウム講演集、関西大学先端科学技術推進機構、平成26年、pp114-117」の再録である。

(講演:2014年1月23日)

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅「団地」の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究(平成23年度～平成27年度)」によって作成された。

発行:2014年3月

関西大学

先端科学技術推進機構 地域再生センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
先端科学技術推進機4F 団地再編プロジェクト室

Tel : 06-6368-1111 (内線:6720)

URL : <http://ksdp.jimbo.com>